

読書通信



No. 120

① 畏友松本健一さんが逝ってしまった。もつとたくさんの本を書いてほしかったし、経済倶楽部でも講演をしてほしかった。暮れに奥様から「最期にたのしみながら校正していた著作」と長女亜沙子さんの編んだ著作・著述リストをいただいたので、改めてその『著作を読み直した』この欄で取り上げた松本さんの本がまたの著者中、最多の7冊にもなることを伝えると破顔一笑されたことなど、思い出しながら。

というわけで頂戴した松本健一『評伝北一輝 第5巻』（中公文庫、1080円）であるが、

これで文庫版が完結した。二・二六事件に直接のかかわりを持たなかったにもかかわらず、自分を慕っていた軍人たちが刑死するに及んで自ら進んで死を受け入れた北の信条と心情が見事に描き出されている。右翼、左翼とレットテルを貼ることの愚かしさを知るキツカケとなったのもこの評伝だった。文庫全5巻でも、2008年12月号当欄で紹介した松本さんの『北一輝の革命』（現代書館）でも、ぜひ一読されることをお勧めしたいと思う。なお前記「著述リスト」には経済倶楽部での講演がすべて記録されていることを付記しておきたい。

② 民主党政権があまりにひどかったので、とすべての政治評論家が言う。だからと言ってそこから学ばない手はない。藤村修『民主党を見

つめ直す』（毎日新聞社、3024円）は野田内閣の官房長官だった著者に、政権時とそれ以前の野党時代について政治学者の竹中治堅氏がロングインタビューしたもので、著者の人柄と巧みな質問によって優れたオーラルヒストリーとなった。東日本大震災（当時は幹事長代理、尖閣国有化や一体改革をめぐる証言も貴重で、意思決定や政策実行など多くの欠点も浮き彫りとなっている。ざつくばらんな発言のためもあり、思った以上に面白く読めたのはよかった。③ ホームでも階段でもスマホの画面から目が離せない人びとがなんと多いことか。中でもゲームの熱中者は室内にこもる場合がほとんどなので、親も誰も気づかず深刻な事態となっている。岡田尊司『インターネット・ゲーム依存症』

（文春新書、885円）で知るその驚くべき中毒症状は他人事と言っておられないほどひどい。子どもも若者も朝までゲームに取りつかれ、翌日の勉強も仕事もまるで体をなさないうえに、脳は急激に壊れていくのだという。そして日本は世界で最も事態を等閑視している国らしい。少子化問題より、少ない若者たちがこんな崩れていくほうがはるかに深刻ではないか。

④ 外国人観光客が急増して政府は大喜びだが、喜ぶ前にアレックス・カー『ニッポン景観論』（集英社新書、1296円）を読むべきだ。『コングリートの「芸術」、無思慮な看板の氾濫、汚らしい電線と電柱、あまりに醜悪な日本の景観を解決するのが先である。カラー版なので笑ったり憤慨したり、大いに考えさせられる。（純）